

Title	大鏡の批評性
Author(s)	伴, 利昭
Citation	語文. 1965, 25, p. 35-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68560
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大鏡の批評性

伴 利 昭

大鏡は古来、多くの読者を持っている。それは、大鏡のもつ優れた文芸性に由来することはいうまでもないが、今一つ読者を惹きつける点は、その批評の痛快さであると云われており、その性格として種々の意見が出されている。即ち、反道長的なもの否定の上に立つ道長主義の文明批判説、美的批判説、理を以てせず事を以てする批判説、源氏の立場からの道長批判説、下級藤原貴族の道長批判説、常識的批判説等である。

一体、批評という言葉は、語義的には、長所短所是非を見極めて、その意見を發表し、論議することなどと解されているが、肝要なのは、長短是非を見極めんとする意識の有無であり、その意識がもたらす或る個人の見解が存することであろう。たとえ、批評的文辭がそこそこにはまかれていたとしても、こうした意識を欠くなら、秀れた批評として称揚するわけにはいかない。井戸端會議に他人の批判はつきものだが、それらは単なる誹謗中傷に過ぎぬことが多い。誹謗や中傷を批評と同列に扱う人はまさかあるまい。が、表面的な批評の持味にのみ拘泥して、その批評意識を看過するなら、中傷即批評ほどの誤りは冒さずとも、ありふれた常識の見解に、卓抜な批評眼として喝采を送り兼ねない。要するに、批評を論議する場合に

は、その底にある批評意識を忘れてはならないだろう。こうした観点に立って、大鏡の批評を考えてみようと思う。つまり、大鏡の所謂批評的傾向が果たして作者の批評意識に立脚するものなのかどうか。以下、それを検討してみよう。

I 言葉に表われた批評

一般に大鏡の批評とされるものは、二つの形をとって現われる。一つは、言葉に表わされた批評であり、今一つは、裏面暴露による批評である。先ず、ここで前者を考えてみよう。栄華物語にも批判は皆無ではないが、その多くは世評を伝える程度である。ところが、大鏡は各所に人物評を伴い、その人物の行為を論難して、見事な批判を展開しているとされ、炯炯たる批評眼、隼の如き持味などと最上級の讚辭が与えられたりしている。しかし、これら大鏡の批評を言葉通りに受けとって良いものかどうか。批評意識の強弱有無という立場からみると幾つかの問題が生じるのである。

(1) 常識的批評

書中に頻出する批評的な言葉は、その強さから云えば、大部分常識的な軽い批評である。例えば、

いかなる人かは、このごろ、古今・伊勢語などおぼえさせたまはぬはあらんずる。「みもせぬ人の恋しきは」など申ことも、この御なからひのほど、こそはうけたまはれ。すゑのよまでかきおき給けむ、おそろしきすきものなりかしな(陽成院、日本古典文学大系Ⅱ東松本底本による。傍点筆者。以下同じ)

この大将保忠、八条に住給へば、内にまいり給ほどいとほなるかなるに、いかとおぼされけん、冬はもちぬのいと大なるをば、ちひさきをば二をやきて、やき石のやうに御身にあてゝもちたまへりけるに、ぬるくなれば、ちひさきをばひとつづ、おほきなるをばなかりわりて、御車副になげとらせ給ける、あまりなる御用意なりかし(左大臣時平)

の如きである。これらは非難の気持を込めたものではなく、極めて常識的であり、批評の底に作者の思想を感取することは困難である。世継は屢「いみじかりし事ぞかし」、「いとめでたかりしか」などと感嘆の声を漏らす、そうした感想、感慨の類と大同小異であろう。このような軽い評は、大鏡の対談形式に因るところが大きいと思われる。対談形式は直接表現を採るので、話者の主観が表出され易い。従つて、言わずもがなの軽い感想や批評までも記され勝ちである。たゞ、注意すべきは、軽い批評でも、その数が多くなると、批評的ムードを作り出して来ることである。つまり、大鏡に批評ありという印象を与え易いが、その実、批評意識の薄いものが多いのである。更に云えば、このムードは後に見る裏面暴露記事をも、頭ごなしに鋭い批評意識の産物と考えさせ易いが、果たしてそう断定出来るのか。こゝで、常識的な軽い批評が多いことを敢えて指摘する所以でもある。

(2) 思想性の稀薄な強い批評

大鏡には、ある種の思想からなされたと思われる批評や或る人物に対する強い批判を含んだものも幾つか出てくる。時平に附された批評は、その最も著しい例である。

右大臣道具は、ざえ、世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても、殊の外にかしくおはします。左大臣時平は、御年も若く、ざえも殊の外に劣りたまへるによりて云々(左大臣時平)

と作者は時平をこきおろすのである。更に、彼の讒言を知つては、あさましき悪事を申をこなひたまへりし罪により、このおととの御末はおはせぬなり(左大臣時平)

と極めつける。山岸徳平氏は、大鏡が「道理」を史観の根底とし、それに照らして、時平即ち非道の者を強く批判しているとされるのである。確かに、時平はこっぴどく非難されている。しかし、それが山岸氏の指摘されるほど強い批評意識——一貫した思想に立って物事を観、その是非を論じようとする意図——があつたかどうかは疑問である。時平を非難していることは事実であるが、一方で作者は、世継に次のように語らせている。

それぞかし、時平のおとどをば、「御良すぐれ、こゝろだましひすぐれかしこうて、日本にはあまらせ給へり。日本のかためともちぬんにあまらせたまへり」と相し申しは(昔物語)

これは明らかに先の時平評とは逆のものである。たゞ、前者が世継の口から語られ、後者は相人の言葉である点が違つているので、直ちに大鏡の評が明らかな矛盾を示しているとは云えない。しかし、作者は昔物語に於ける時平評について一言半句も附言していない。そこだけを読むなら、作者の意見ととつてもさして不自然ではない。

少くとも、相人の言と作者の意見とが異っていることを感じさせるものは何もない。まるで先の時平に対する酷評を全く忘れて了っているかのようである。こうした作者の態度は、彼の批評が強い一貫した批評意識に立っているとする見解に、少なからぬ疑問を抱かせるものである。恐らく、昔物語のこの段は、作者の興味ある話として語られたのであろう。が、この時の作者の頭には先の時平批判は影をひそめている。独自の見解によって物事を観ようとする人間ならば、こうしたことは起らなかつたであらう。大鏡作者に於ては、興味ある話を語ろうとすることが第一であり、批評的意図は第二義的なものになっていることが窺えるのである。少くとも、先の時平評は、右の記事によって、その強さを著しく相殺されているのである。又、同じ時平伝には、一見或る思想に基いてなされたような強い批評が語られている。

きたのの神にならせ給ひて、いとおそろしくかみなりひらめき、清涼殿におちかゝりぬとみえけるが、本院のおとゞ時平、大刀をぬきさけて、「いきても我つぎにこそものし給しか。今日、神となり給へりとも、このよには、我にところをき給べし。いかでさらではあるべきぞ」と、にらみやりて、のたまひける。一度はしづまらせ給へりけりとぞ世人申はべりし。されど、それは、かのおとゞのいみじうおはするにはあらず、王威のかぎりなくおはしますによりて、理非をしめさせたまへるなり個人としての道真は時平に恐れたわけではないが、朝廷で定められた秩序をみだすことは王威に服さないことになる。それで左大臣の公職に対して一度は時平の言を聞き入れたというのである。それほど道真は王威を畏敬していたのであり、それはとりもなおさず作者

の思想でもあったのである。他にも天皇の權威を説いた所があり、大鏡の一つの思想として王威の思想が指摘されているのである。ところが次の文章はどうであらうか。

朱雀院むまれ給て三年は、おはします殿の格子もまいらず、よるひる火をともして、御帳のうちにておほしたてくまいらせ給、北野におまうさせ給て。(昔物語)

こゝでは道真の霊が皇家を苦しめているのであり、世継もはっきり「北野におまうさせ給て」という言葉を口にしてゐる。先の王威思想も随分怪しげなものといわねばならぬ。作者が皇家を畏敬する気持を持っていたことは事実であらうが、そうした思想から物事を観ようとはしていないのである。そこから、右の矛盾が生じるのであり、先の王威思想も、その言葉ほどには批評意識は強くないのである。今一例挙げてみよう。

御子二人おはせしも、五位にて典薬助・主殿頭などいひて、いとあさくてやみ給にき。かくばかりすまさかえ給ける中納言殿長良を、やへくの御おとゞにてこえたてまつり給ける御あやまちにやとこそ、おほえ待れ(右大臣良相)

これからみると、弟が兄を越すことについて、作者は強い批判の気持を抱えていることが分るが、弟が兄を越して昇進するのは、当時それほど珍らしい出来事ではない。師氏と師尹の場合もそうであるところが、作者はこれには何ら触れずに終っている。更に良房の場合、弟の良相と共に兄の長良を越したことを自ら記して、しかも

かくいみじき幸人の、子のおはしまさぬこそ、くちおしけれ(太政大臣良房)

と云うのである。同じように兄を越し、同じように子孫が栄えなかったにも拘らず、一方は「あやまち」の自業自得であり、他方は「くちおしけれ」と同情されているのである。「やへ／＼の御おとゝにてこえたてまつり給ける御あやまちにやとこそ、おぼえ侍れ」という限りに於ては、作者が弟の僭越に対して強固な信念を持っていることを思わせるが、一度、話の場が変わると「子のおはしまさぬこそ、くちおしけれ」と評している。こゝに至っては、先の強い信念を窺うことは出来ぬ。この二つの態度をつき合せて考えるなら、その場／＼で感じたことを述べたとみるより仕方がなからう。いわば直観的な批評である。或は、時の物の見方をことごとく容認した結果かも知れぬ。少くとも、自己の信念、思想に立って、物事を観ようとする人間の態度ではなく、大鏡の批評の思想的背景は稀薄であつたと言えよう。従って、或る箇所、或る言葉に限ってみると、道理に立脚する批評と思われるものも、その実、はなはだ曖昧なものが多いのである。当時の「道理」はそうしたものであつたかも知れぬが、今日我々のいう道理ではない。一体、道理という概念は甚だ雑駁なものであるが、多くは手応えの確かな感覚的日常経験の世界に或る規範を与えたものである。観念的抽象的世界の中で論議されるのではなく、具体的日常的なものを通して、或る規範、価値等を抽出するのが、道理と呼ばれるものの特徴であらうと思う。道理は日常的な世界と極めて密接な関係にあるのである。従って、具体的現実的な事柄を取り扱って、しかもそれに価値判断が附されていったりすると、それが所謂道理と考えられ易いのである。しかし、その価値判断が思想的抽象的なものに止揚され得ぬ場合は、道理と名づけるわけにはいかないだらう。大鏡の批評に思想性が稀薄である

ことはすでにみたところである。とすれば、道理というよりは、むしろ常識的直観的批評と考えるほうが穩当であらうと思う。

(3) 性格描写としての批評

大鏡は各所に人物評を伴っている。例えば、

(佐理は) 御心ばへぞ、懈怠者、すこしは如泥人ともきこえつべくおはせし (太政大臣実頼)

(時平は) もののおかしさをぞ、え念せさせ給はざりける。わらひたゝせ給ぬれば、頗事もみだれけるとか (左大臣時平)

八宮とて男親王一人むまれたまへり。御貞などはきよげにおはしけれど、御心きはめたる白物じぢとぞきよたてまつりし……中略……しかしれたまへりける、いと／＼あやしきことなりかし (左大臣師尹)

右の如き人物評は、一見、毀誉褒貶を含んだ人物批判のようにも思われるが、単に、その人物の性格、性癖、或いは欠点を指摘しているに過ぎない。何故なら、第一に、この人物評に続いて、それに応じた逸話が語られるが、そこから批判的な意味をくみとめることは難かしい。佐理の場合は、彼が東三条の障子に字を書くようにとの榮譽を受けながら、当日上達部などを散々待たせた挙句、日が高くなってからやって来て不評をかつたという話が先のぐず、ものぐさ評に対応している。が、そこには作者の非難は感じられない。かえって、彼を招いた道隆に対する人々の誇りの言葉が附け加えられているほどである。八宮の場合も、大鏡に於ける異常な言動が描かれているが、作者は同情の気持さえたとよわせている。時平と同じである。彼は某の吏が文書を差し出す拍子に放屁すると手を戦かせて笑ひ出し、終には笑を堪えることが出来ず、その日の議定を中止し

てしまう。そこには「頗事もみだれける」ことに対する批判は語られず、時平の異常な笑癖に対する作者の並々ならぬ好奇心がみられるだけである。このように、後に描かれる逸話からは、作者の批判は窺えないのであって、「懈怠者、如泥人、しれ者」といった言葉に批判的意味は見出しにくいのである。好ましくない性質、欠点といったものを指摘したに過ぎず、それとやかく批評しようという気持はなかったと解される。第二は、人間の欠点、醜態さといったものも、作者の人間観に於いては、必ずしも批判されるべきものではないということである。大鏡の世界に君臨する人々に共通するものは「実に猛烈な意欲的性格である。そこには意地の強さや、不敵な剛愎さや、外発的な強気や、老獪な策謀など、凡そ愛や叡知とは異なる我意の主張が見られる」（小松茂人氏、大鏡の人間像、国文学第二巻第十二号）と云われるように、大鏡のとり出した人間は、平安女流文学に於ける人間像とは極めて異質のものであり、いわば、諸々の欲望、弱さ、矛盾、欠点を併せ持った「生身の人間」である。作者は人間の理想像を求めたのではなく、善悪正邪の相剋するありのままの人間に限りない興味を抱いているのである。従って、時平の笑癖や佐理のものぐさ、八宮の異常な振舞といったものも作者の興味の眼を引きこそすれ、批判の対象ではなかったろうと思われる。結局、これら人物評は批評としてのものではなく、人物描写の手段と考えられる。大鏡にはこうした、批評を第一義の目標としない人物評が少なからず存するのである。

(4) 世人の評

大鏡には多数の人物が登場するが、これら人物の批評的な言葉も採り入れられている。そして作者は、時には史上の人物の言葉や世

評に託して、作者自身の批評を洩らしたのだと説く見方もあるが、果してそうか。例えば、(2)で引用した昔物語の菅公の霊の話は当時の風説を記したものと思われる。

日本紀略に「延長元年三月廿一日子刻、皇太子保明親王薨、年廿一。天下庶人莫不悲泣、其声如雷、拳世云、菅師霊魂宿怨所為也」ともありて、これによりて、天皇御降誕の後も、菅公の霊を怖れたるなるべし（佐藤球氏、大鏡詳解）

当時の人々は道真の霊のことを色々取沙汰していたのであろうが、それを大鏡作者は昔物語にとり入れて「北野にをちまうさせ給て」としたのであろう。しかもそれは、時平伝であれほど強調した王威の思想とは相容れないものである。作者はこの評語を深い考えなしに採ったとは思われず、従って、そこに作者の批評が籠められる筈もない。このような作者の態度は、他の世人の評も、同様に批評意識の薄いものでなかったかという疑問を抱かせるのである。作者の批評を代弁したのもとして、よく引合に出される隆家の言葉も、再検討してみる必要がある。

さて、式部卿の宮の御事を、さりとともくまわちたまふに、一条院の御なやみをもらせたまふきはに、御前にまいり給て、御きそくたまはり給ければ、「あのことこそ、つめにえせずなりぬれ」とおほせられけるに、「あはれの人非人や」とこそまうさまほしくこそありしか」とこそたまふけれ（内大臣道隆）

この「あはれの人非人や」は「道長の専横を憤りて、罵る意」（大鏡詳解）とされていたが、関根直正氏は「元は、後世の如く賤しめ貶す悪罵の語にあらず」とし、その用例から「当時の俗語、他人に聴従する者を喩へて、人非人と云へるなるべし。今此所も、天皇の

御意志弱く、道長の申すにのみ聴従し給ふを、云ひがひなく思ひて、発せし言ならむ。諸註に、道長を罵る言としたるは、さらにあたらず」(大鏡新註)とせられた。「人非人」が関根氏の云われるような意味なら、この言葉が天皇に対して発せられたものであることは一層はつきりするが、そうでなくとも、文脈的には天皇に対しての語と解するのが自然であろう。大鏡新講は、「隆家が帝の食言を憤り、斯様な事をなさったのでは、お気の毒ながら未来は人非人にお生れになるであろうとも申し上げたい程だったとも取れるが、それではあまり恐れ多いから、道長を罵る語と解するのがやはり穏やかであろう」とされるが、それは「帝に対して恐れ多い」という橋純一氏自身の配慮によってなされたものである。ここの所は、素直に、帝の優柔不断を非難した言葉と解してよいと思う。というのは、帝に対する言葉と解して、内容的に何ら不自然なことはなく、隆家なら、そうした事はやりかねないのである。太后遵子・太政大臣頼忠の居る前を馬に乗ったまゝ通って、覗き込んだり、酔って道長に着物の紐をほどかせたり、或は、花山院の門前を車に乗ったまゝで通ろうとして院と争ったり、実に傍若無人ともみえる豪放な氣質が描かれている。「あはれの人非人」と天皇に云いたく思ったところで、何ら突飛な話ではない。むしろ、如何にも隆家らしい振舞である。とすると、この言葉は大鏡作者の見解でないことは云うまでもない。即ち、作者は、隆家像を描き出すためには、自分にとって好ましくない言葉まで話させているのである。隆家の言葉を借りて自己の批評を展開しようというのではなく、単に人物描写の一環として表出されたものに過ぎない。話をすゝめるに際して、作者は自分の言葉によらず登場人物間の会話によっているのであり、作者は唯その会

話の筆記者の立場に止っているのである。文学的意図が批評意識より優先していると云えるだろう。

隆家は又、次のようにも放言する。

この当代や東宮などのまだ宮たちにておはしましとき、まつりみせたてまつらせたまひし御さじきのまへすぎさせたまふほど、この御ひざに二所ながらすへたてまつらせたまひて、「このみやたち、みたてまつらせたまへ」と申させたまへば、御輿の帷より、あかいろの御あふぎのつまをさしいでたまへりけり。殿をはじめたてまつりて、「なを心ばせめでたくおはする院なりや。かゝるしるしをみせたまはずば、いかでか、みたてまつりたまふらんともしらまし」とこそ、感じたてまつらせたまひけれ。院より太宮にきこえさせ給ひける、

ひかりいづるあふひのかけをみてしより、としつみけるもうれしかりけり

御かへし、

もろかづらふたばながらも、きみにかくあふひやかみのゆるしなるらん

げに賀茂明神などのうけたてまつりたまへればこそ、二代までうちつゞきさかへさせたまふらぬな。この事、「いとおかしうせさせたまへり」と、よの人申しに、前の帥のみぞ、「追従ぶ

かきおひぎつねかな。あな愛敬な」と申給ける。(右大臣師輔)

これも、大齋院が道長に諂うのを見て、隆家が「追従深き老狐」と評した率直放胆の言に作者の氣持が籠められているのだとされているが、成程、そう考えると作者の並々なぬ批判があつて面白い。もし現代の我々がその場に居合わせたら、隆家の言葉に喝采するで

あろう。我々は道長やその追従者達を現代の批評眼で眺め得るのであり、そして恐らく、隆家と同様の事を思ったであろう。隆家の言葉は我々に強く訴えるものを持っているのである。しかし、だからといって、作者の考えも同じであると、直ちに断定することはできない。先ず、右の文章で注意せられるのは、隆家の言葉と一緒に、逆の世評も取り上げていることである。先に「げに、賀茂明神などのうけたてまつりたまへばこそ、二代までうちつづきさかへさせたまふらぬ」と院を肯定的に語っているところからすると、作者も「よの人」と同じく「おかしく」感じていたと思われる。少くとも否定の気持は稀いであろう。同時に、隆家の言葉も採り上げて、二つの対立する見方を描いている。しかも、作者は孰れの立場にあるのかは明言していないのである。我々の感想が隆家のそれに近いからといって、後者が作者の気持だと決める理由にはならない。こゝは、孰れか一方をとるというものではなく、二つの立場が同時にあると考える方が自然であろうと思う。つまり、作者はこれらで以て自己の批判を代弁せしめようというのではなく、さうしたもののより一段高いところから睥睨しているのである。そしてこの一段高い見地とは、事件、人物、状況等を生き／＼と描きださんとする文学意識であつたろうと思う。人々の「いとおかしうせさせたまへり」という言葉を書くとき、我々は、物のあはれに象徴せられる平安貴紳のもつ世界を見、隆家の「追従深き老狐かな」に接しては、生々しい人間の世界を連想させられるのである。前者は紫式部や清少納言の世界であり、後者はそれとは異質の世界である。両者は孰れが是であり、非であるというべきものではなく、又孰れか一方で尽し得るほどこの世は単純でもない。二つの世界を共にもち込んだからこ

そ、大鏡のみた世界は一層深く、巾広いものになり、登場する人物や事件は生き／＼とした立体感を持つのである。作者はこうしたものの見方から、事件を描写し、諸人の評を採っているものであり、自己の代弁として隆家の評を採っているのではない。二つの対立する評言は、批判的意図を超越した次元で語られていると解せられるのである。即ち、隆家の非難は、この事件をより深く、立体的に描きだすためのものであり、或は作者の興味を惹いた隆家という人間を描くためのもの（隆家像の描写だと考えると、「前の帥のみぞ」と強く限定した言葉が生きてくるように思う）といった文芸的な意味が強いのである。こうした表現法はいくつか指摘できる。既にみた佐理の描写や時平像からも窺えるのであり、更に云えば、二翁と若待の対談形式もこれに通じるものがある。要するに、隆家の言葉を通して得た大鏡の世人の評の特徴は、第一に、自己の見解に添わぬ評をも、人物事件を描く手段として利用していること。第二に、立体的描写の一端としての世評が存することである。こうした特徴は、とりもなおさず、作者が批評意識を以て世評を取り扱ったものでないことを示すのである。

以上この章では、言葉に表わされた批評を考えたのであるが、その結果をまとめると次の四条になる。

- (1) 常識的批評
- (2) 思想的矛盾を含む直観的批評
- (3) 性格描写としての人物評
- (4) 文芸的意図により引かれた世人の評

大鏡の批評意識の弱さを思わせるのは(2)であり、批評的次元を超越した境地で語られたのが(3)と(4)で、その言葉通りに批評を受け取るわけにはいかない。結局、全体としては、常識的直観的批評が大鏡

の批評として指摘されるのである。

II 裏面暴露記事

大鏡には、裏面を暴露した記事が幾つかあって、大鏡の一つの特徴をなしている。そして、それは作者の批評意識によってなされたと普通考えられている。裏面の暴露に批評はつきものであるが、大鏡の場合は、批評の言葉をはさまずに淡々と事実のみを語っているのである。これはいかなる意味を持つのであろうか。

(1) 批評の言葉がないこと

大鏡の裏面暴露に、批評の言葉がないということは、早く藤村作博士によって指摘されてきたが、その意義については、凡そ三通りの考え方が可能であろう。第一は、たとえ、言葉の批評はなくとも、事実の暴露によって、批評を代弁させたとする見方。⁽⁵⁾第二は、是は是とし、非は非として、客観的に述べることによって、歴史的真相を明らかにしようとする公平な批評態度の表われとみる考え。⁽⁶⁾第三は、批評とは関係のない記事とする見方。このうち、孰れが最も妥当か考えてみよう。

第一説の場合、言葉で表わされた批評より一層強い感銘や説得力を持つこと屢であるが、同時に、読み取る者の曲解、独断に陥る危険が存するのである。一体、作者はそれほど鋭敏な批評意識の持主であったらうか。それほどまでに批評を旨としていたであらうか。この説には否定的にならざるを得ない。前項でみたように、文芸的批評、即ち批評が作者の重要な目的でないことを示すものの存在や矛盾した批評から感じられる作者の批評意識の弱さを思うと、この説に、直ちには従えないのである。

第二説の場合にも、一、二の疑問が出てくる。即ち、作者はそれほど真実究明に意を用いたかと考えてみるに、そうとばかりも云えない。例えば、道真配流について、それを時平の悪事と極めつけ、子孫が栄えなかつた原因だとまでしているにも拘らず、たゞ「右大臣の御ためによからぬ事いできて」というだけである。それに引きかえ、道真の悲嘆は、その詩歌を通して長々と語られる。帝王編年記の記事や雷神の風説によっても、当時この事件が色々取沙汰されていたことが想像され、事件の内容もかなり明らかにされていたと思われるが、作者は事件の真相も、何故悪いかも示そうとはしない。更に、大鏡は歴史を語ることを一往の目的としながら、屢事実の歪曲を行っている。意識しない事実の誤りではなく、明らかに或る目的をもって、意識的に歪められたのである。しかも、その目的は文芸的興趣を盛り上げることにあると指摘されている。⁽⁷⁾大鏡自身次のように云う。

このしげきがいふやう、「大織冠をば、いかでかたんかいこうと申さん。大織冠は、大臣の位にて廿五年、御年五十六にてなんかくれおはしましける。ぬしのたぶ事も、あまのがはをかきなやすやうに侍れど、おり／＼かかるひが事のまじりたる。されども、たれか又かうはかたらんな。仏在世の浄名居士とお

ぼえ給ものかな」(藤氏物語)

このあたり、不比等の子、宇合・磨を鎌足の子としたり、天武天皇を天智天皇の子として大友皇子と混同するなど、殊更と思われる誤りを重ねた末、世継に大織冠を淡海公と云わせ、繁樹に論駁させているのである。「かゝるひが事」は、作者が誤りを誤りと知りながら書いたことを示すのであり、しかもそれは、諸所に見られる史実

の歪曲と一致し、更に「されども、たれか又かうはかたらんな。仏在世の浄名居士（注、雄弁の聖者）とおぼえ給ものかな」という繁樹の言葉は、文芸意図による史実の歪曲と見事に承応しているのである。こうした叙述態度からして、裏面記事を真実を追求した結果と考えるには躊躇されるのである。第一、二説とも、批評と結びつけて考えるには問題があるので、第三の見方の如く、批評と切り離して考えるのが穏かでないかと思う。では、批評意識の産物でないとするなら、一体、何であろう。先ず考えられるのは、他の挿話との関係である。大鏡は道長の栄華を語ることを目的としながらも、その構想から離れた逸話の類が実に多い。世継が断つた「余教」程度ではないのである。その種類は多岐にのぼり、主題から離れた、興味ある話の収集の感さえある。そして、この興味の内容は活動的、男性的で、女房文学の連綿とした情緒とは趣を異にしているのである。例えば、師輔が貫之を訪れた時、作者は次のように云う。

いとをかしきことは、かくやむごとなくおはしますとのゝ、貫之のぬしがいへにおはしましたりしこそ、「なを和歌はめざましきことなりかし」と、おほえ侍しか（右大臣師輔）

作者は和歌の価値を抒情の世界から切り離して、日常の世界に結びつけているのである。いかにも現実的なものの見方と云えよう。時平の笑癖、忠平の鬼にとらわれる話、道長の競射の話なども、女房文学の美意識とは別趣である。作者の人間観は「大鏡の意欲的人間像はその強韌な意志において、猛烈な意欲において、世才の逞ましさにおいて、『ものあはれ』の主情的感傷に生きた源氏物語の人間像などとは明らかに異なるものがある。そこには現実に失望しな

い人間の尊大な自負がある。奔放不羈への志向がある。これは女性的優美ではなくて男性的豪宕さである。このように豪快な積極的人間性は大鏡以前の物語にはかつて描かれたことはなかった。これこそは大鏡が形成した新しい人間美の典型である。」（国文学第二巻第十二号、大鏡の人間像、小松茂人氏）と云われている。別な面から云えば、作者は人間の理想を追い求めたのではなく、現実ありのままの人間に興味の目を向けているのである。人間の美しい面のみ憧れたり、現実の苦を逃れて美の世界に陶醉するのは全く逆に、欲望を持ち、欠点の多い、矛盾に満ちた現実の人間世界に執着し、興味を抱いているのである。人間のもつ愛は美しかろう。美しいその愛を作者は見ようとするのではない。愛と同時に憎しみや怒りを持つ人間を見ようとするのである。憎しみは避けられるべきものではなく、かえってそこに人間らしさを感じているのである。そうした如何にも人間的なものとして、作者は我意、意欲を取り出したのである。それは男性的、意欲的、活動的とも云えるのである。ところで、所謂裏面なるものは、人間の欲望や弱みやずるさを晒したものであることが多い。生身の人間を感じさせる点では最たるものがあり、現実的、活動的でもある。極めて人間的な面を露呈したものと云えよう。即ち、作者の興味の傾向と裏面描写は密接な関係があり、他の挿話とも一連のものと言えらるだろう。

(2)裏面が事実として語られること

醜惡な面が事実として淡々と描かれているということは如何なる意味を持つのであろうか。大鏡の成立年代は今日猶確定していないが、作者の仮託した万寿二年以後であることは間違いないであろう。栄華物語との関係や万寿二年以後でないと言けない記事があること

から院政期にまで下るとする考えが支配的であり、万寿二年を去ること五、六十年の時代に書かれたと考えて良からうと思う。その頃は道長一派の時代は過ぎ、彼等の所業は批判的に或いは客観的に眺められ、今まで隠されていた醜悪な面も明らかにされたであろう。

しかもこの新しい見方が当時にあつては事実として受け取られるのである。何の批判意識を持たぬ人間でも、少しく教養を持つ人ならば醜い一面を事実として語ることが容易であろう。一度、時代が移れば、新しい眼で眺められるのは歴史の通則である。現在のスターリン然り、太平洋戦争又然りである。例えば、明治憲法について問われたら、我々は直ちに非民主的であると答えるだろう。これは現在の事実である。何の批判的意図なしにも、この解答は可能である。中学生からこの答えを期待することすら容易であろう。しかも大事なことは、この答えが昭和二十年以前に発せられるには、並々ならぬ見識と批評眼を要することである。現在の我々の言葉を戦前の言葉として聞くなり、そこには痛烈な批判が籠っているであろう。だが、それは時間のからくりであつて真の批判ではない。大鏡も同様である。作者は道長一派の時代が終つた後にあつて、しかも万寿二年の記述として話を進めているのである。従つて、後に明らかにせられた裏面を事実として描くことは容易であり、それを万寿二年に於ける見解とみる限りに於ては、鋭い批評眼と云うべきであらう。しかし、事實は作者が後の時代の雰囲気を負つて現われたに過ぎず、批評というよりは批評的持味と呼ぶ方が相応しいと思う。

以上要約すると、大鏡の裏面記事は、作者の批評意識に支えられているのではなく、作者の興味からとり出されたものであり、たゞ、時間のづれと素材の性質とによつて、批評的な気分を醸すことにな

つたのである。

III 結論

I、IIを通じ、大鏡の批評とされるものは、概して常識的直観的であり、又批評を重要な目標とはしていないのである。批評の底流としての一貫した強い思想性も感じられず、批評をしようという意識も作者には強くなかつたと思われる。従つて、大鏡の批評はその基準を一つのものに求めることは困難であり、又批評の性質も一、二に止まらないのである。その重なるものを挙げれば、

1、常識的直観的批評

文字通り常識的直観的な評や、言葉としては強いが、思想性の稀薄な批評などである。

2、文芸的批評

人物、性格等を描写するために利用された批評で、批評としての批評ではない。

3、作者の興味・美意識の傾向から生じた批評的持味

作者の世界観、人間観が現実的であつた為に、人間の我意、醜くさといったものも、善悪是非の価値観から眺められずに、かえつて人間的なものとして作者の興味を惹いたのである。その結果、裏面暴露記事が多く描かれた。裏面暴露は、それ自体批評的な気分を有しているが、作者は批評を目ろんだのではなかつた。従つてそれは批評的気分以上のものではない。

4、時間のづれによつて生じた批評的持味

大鏡は万寿二年を装いながら、数十年の後に書かれたのであつた。これによつて、批評的ムードが漂うことになつたが、それは作者の

作り出したものではない。

以上は、孰れも批評と云えば批評であるが、大鏡作者独自のものではないという点で、或は作者の批評意識が強く籠められていないという点で、常識的直観的批評と一括してよかろうと思う。批評が作者の著作意図の中で重要な位置を占めていなかった為に、言葉の上だけの批評や批評的な気分にとどまったのであり、批評の尺度として一貫した基準も指摘し得ないのである。

注

- 1 日本古典文学大系、大鏡解説二三頁参照
- 2 日本古典文学大系大鏡、月報41
- 3 次田潤氏、国文学史新講上
- 4 国語と国文学創刊号、大鏡に関する考察
- 5 北西鶴太郎氏、文芸と思想昭和二六年七月
- 6 藤岡作太郎氏、国文学全史平安朝篇
- 7 平田俊春氏、国文学第二卷第十二号、大鏡の史実性について

(本学助手)